

住居観に関する研究

その6、住居観型と調査項目の検討

中 島 喜 代 子

Studies on the View of Dwelling House and Home Life

Part 6, Analyses of the Type of the View of Dwelling House and Home Life, and the items of its' investigations

Kiyoko NAKAJIMA

＜要 約＞

まず、住居観型仮説の検討を行った上で、これまで住居観に関する既研究で住居観型抽出に用いてきた調査項目の妥当性と優位性を検討することを目的とし、2つの調査を行った。その結果、これらの調査項目の妥当性と優位性を明らかにした。

1. 緒 論

これまで、一連の住居観についての研究をおこなってきた¹⁾。これらの研究においては、まず、住居観型の仮説を設定し、設定した住居観の型にもっとも適合すると考えた調査項目を作成し、それを基にQモード因子分析の方法を用いて住居観パターンを抽出した。

本報では、まず、住居観型仮説について再度検討を加えた上で、既研究において住居観型抽出のために用いた調査項目が、回答者の側においては、こちらが意図した住居観型に対して実際にはどのような住居観型ととらえられているかを検討し、作成した調査項目が、意図した住居観型との対応関係の点において、妥当なものであったかどうかの吟味を行う。また、作成した調査項目以上に、より適切な調査項目が存在するかという点についても検討を加え、用いた調査項目がより優位なものであるかどうかの吟味を行う。

2. 調 査 方 法

調査は、2度にわたって行った。第一の調査は昭和63年1月に行ったもので、三重大大学・教育学部家庭科2年生の学生を対象とし、22名のサンプルを得た。調査は、仮説の9個の住居観型についての説明をまず行った上で、作成した調査項目が9個の住居観型の中でどの住居観型にもっとも該当すると思うかを、その中から一つ選ばせて答えさせる方法をとった。

第二の調査は、昭和63年7月に行ったもので、三重大大学の男女学生とその母親を対象とし、学生56名とその母親48名のサンプルを得た。この調査は上記の場合と同様に、まず仮説の9個の住居観型についての説明を行った上で、各調査項目について、その9個の住居観型に対して、それぞれ該当すると思うかどうかを答えさせた。回答選択枝のカテゴリーは、該当すると「思う」・「何ともいえない」・「思わない」の3分割とした。また、この調査では、既研究で用いた調査項目だけでなく、用いた調査項目の優位性を検討するため、新たな項目を追加して比較検討した。

第二の調査を行った意味は、以下の3点にある。
①まず、第一の調査は一つの調査項目に対して、もっとも該当すると思う一つの住居観型との対応関係について調査したものである。しかし、実

際には一つの現象（項目）は、とらえる人によってはいろいろな価値観の側面をもってると同時に、一人の回答者の中でも複数の価値観の側面がとらえられることがありえる。そこで、第一の調査の単一回答方式に対して、複数回答方式をとった点である。②また、調査対象についても学生だけでなく、実際の住経験が豊かな母親をも対象に加えた点である。③さらに、調査項目の優位性を検討するために、比較分析のための新たな調査項目を加えた点である。

3. 調査の内容と考察

1) 既研究における住居観型の検討と仮説の設定

a. 既研究における類型と解析軸の設定例

建築学の分野においては、これまで西山・扇田、上林等によって住居観型（住意識型）が提唱されている（表1参照）。西山・扇田は「ねぐら」型を最低にして住意識が強くなるにしたがい、そのあらわれ方は様々な方向を示すとし、住要求を自主的かつ積極的に出す意識型の対として、住生活を住み手自身が生活を楽しむ1つの場として考え、家族本位の生活空間をつくりあげようとする「たのしみ」型と、これに対して住生活を他人との関係においてとらえ、自ら楽しむというより、生活上の地位、名誉、富裕等の優越した生活内容を、住生活ないし住宅をとおして外に示威する「みせびらかし」型を対置する型として設定している。さらに他動的または消極的な意識の対として住生活に過去の伝統や習慣を持続し守っていかうとする「しきたり」型と、現象的に全く異なった方向の住意識型として、古いものに執着せず競って新しさを住生活にとりこむことを信条とする「あたらしがり」型を設定している。また、これらの型の中で「たのしみ」型を積極的に伸ばされなければならない型と位置付けている²⁾。

これに対して、上林は「自律型」（他人のことは気にせず、自分のやりたいようにする型）、「合

理主義型」（すべてのことを合理的に割り切って処理する型）を加えて西山・扇田の「たのしみ型」をさらに細分し、西山・扇田の「あたらしがり」型に対して「雷同型」（よそでやるから自分のところも……というような一般大衆に多い型）を加えた型設定を行っている。西山・扇田が提唱する類型と上林が提唱する類型との間に以上のような差異が認められるが、しかしいずれにも社会性を示す類型は含まれていない。また、これらの類型は解析軸から導きだされたものではなく、それまでの研究蓄積の中からある意味では感覚的に引き出されたものであるといえよう。

一方、これまで、社会学等の分野でみられる価値意識の各類型論は、見田宗介等によってまとめられている（表2参照）。見田は、まず人間が社会的な規範に従う動機すなわち良心の構造を四つの領域に分けている。これは、（A）期待の意識：外部の状況的な要因、ことに権威者や周囲の人びとの期待にたいして＜適応＞しようとする志向、（B）原理の意識：内在化された道徳体系や教条によって、自己の行為に首尾一貫した意味的な＜統合＞を与えようとする志向、（C）慣習の意識：伝統や慣習によって水路づけられた既成の行為パターンを、かきみだすことなく＜維持＞しようとする志向、（D）欲求性向の一部となった部分：規範の遂行が、それ自身欲求の＜充足＞であり＜享受＞であるような部分、の四領域である。見田は、これら四つの領域をこれまでの社会学等においてみられる諸類型（パーソンズの行為体系の「局面の移行」における図式、リースマンの社会的性格の類型論、ベネディクトの国民性の類型）と対応させているが、妥当な対応関係であると考えられる。さらに、見田と杉田によって示された独自の対応関係として、自我、それぞれの側面の無視ないし抑圧、さらに、それぞれの領域の相対的な優位による人間のタイプの関連を示している。

これらは、各々の類型論がまったく異なった角

表1.既研究における住居観型（住意識型）

類型提唱者	住居観型（住意識型）							
西山卯三、 扇田 信	ねぐら	しきたり	みせび らかし		あたらし がり	たのしみ		
上林 博雄	無関心 (どうでも)	慣習 (しきたり)	誇示 (みせびら かし)	雷同 (うちでも)		合理主義 (むだなし)	自律 (ゴーイング マイウェイ)	家庭天国 (たのしみ)

表2. 他領域における類型例

類型提唱者	類 型 の 側 面	類 型			
		A	B	C	D
T. パーソンズ ¹	行為体系の局面の移行	適応	統合	維持	充足
D. リースマン ²	社会的性格の類型	他人指向	内部指向	伝統指向	
R. F. ベネディクト ³	国民性の類型	恥の文化	罪の文化		
M. ウェーバー ⁴	行為ないし動機の類型	目的合理的	価値合理的	伝統的	情動的
見田宗介 ⁵ 、杉田英次 ⁶	良心の構造	期待の意識	原理の意識	慣例の意識	欲求性向の意識
	自我に対して	外界への適応	内面的な統合	パターンの維持	欲望の充足
	無視または抑圧に対する反応	恥の意識	罪の意識	自己違和感	欲求不満
	人間のタイプ	他人指向型	内部指向型	伝統指向型	快楽指向型

1. T. パーソンズ：「経済と社会」1956（富永健一訳、岩波書店、1958）

2. D. リースマン：「孤独な群衆」1950（加藤秀俊訳、みすず書房、1964）

3. R. F. ベネディクト：「菊と刀」1946（長谷川松治訳、社会思想社、1967）

4. M. ウェーバー：「社会学の基礎概念」1922（阿部吉男他訳、角川文庫）

5. 見田宗介：「価値意識の理論」1966 弘文社

6. 杉田英次：「思想の科学事典」1969 勁草書房

度からとらえられたものであるにもかかわらず、いずれも四つの類型の中に含まれ同一の類型に帰して考えられるものである。

また、解析軸の例として、表3に示す見田宗介の「価値の性格類型」と門脇厚司による「生き方の型」の解析軸は、いずれも時間的広がり和社会的広がりという二つの軸で構成されており、同一の軸の構成がとられている。

b. 住居観型の仮説の設定

既研究における「住居観」もしくは「住意識」の型は、それぞれ異なっており、またいずれも社会性を示す型は含まれていない。そこで、諸研究³⁾にみられ住居観の型分けに係る解析の軸、類型等を参考にして表4に示すように住居観型をと

表3.. 解析軸の例

解析軸提唱者	解析軸の側面	解 析 軸	
		A	B
見田宗介	価値の性格類型	時間的パースペクティブ (現在中心、未来中心)	社会的パースペクティブ (自己本位、社会本位)
門脇厚司	生き方の型	社会への構え (変革、保持、逃避)	構えの力点 (私重視、公重視)

らえることを試みたものである。これは、西山、扇田、上林等が提唱した類型すべてを含め、さらに社会性を示す型を加えて、各型の関連を表した

表4. 住居観型の仮説

価値意識の類型軸 積極・消極軸	環境的 更新性	機能的 合理性	個性的 主体性	社会的 連帯性	無指向性
積 極 (プラス方向)	斬 新 型 (あたらしがり型)	合 理 型 (合理主義型)	自 律 型 (個性的自律型)	社 会 型 (社会性重視型)	無 指 向 型 (ねぐら型)
消 極 (マイナス方向)	旧態維持型 (しきたり型)	非 合 理 型 (みせびらかし型)	他 律 型 (うちでも型)	非 社 会 型 (マイホーム主義型)	

注：() は、各型に対応する、既研究で使用された型の名称、あるいは本研究で住意見項目作成時に使用する名称

表5. 調査対象が各項目に対して該当すると答えた住居観型の割合

住居観型	省略項目名	ねぐら型 件数(%)	しきたり 型 件数(%)	みせびら かし型 件数(%)	うちで も型 件数(%)	あたらし がり型 件数(%)	マイホーム 主義型 件数(%)	合 理 主義型 件数(%)	個性的 自律型 件数(%)	社会性 重視型 件数(%)
ねぐら型	1. 雨 露	14 (63.6)					1 (4.5)	7 (31.8)		
しきたり型	2. つづきま 3. 家 相		8 (36.4) 21 (99.5)				1 (4.5)	11 (50.0)		2 (9.1)
みせびらか し型	4. 玄関豪華 5. 建 築 家			22 (100.0) 12 (54.5)						
うちでも型	6. つりあい 7. つりあい 8. ひとの目 9. 購 入		1 (4.5) 1 (4.5) 2 (9.1) 3 (13.6)		13 (59.1) 16 (72.7) 10 (45.5) 15 (68.2)					8 (36.4) 5 (22.7) 1 (4.5)
あたらしが り型	10. 新 製 品					21 (95.5)		1 (4.5)		
マイホーム 主義型	11. 居 間 接 客 12. 家 族 間 取 13. マ イ カ ー	1 (4.5) 1 (4.5)	6 (27.3)				7 (31.8) 12 (54.5) 11 (50.0)		1 (4.5) 8 (36.4) 6 (27.3)	7 (31.8) 1 (4.5)
合理主義型	14. 必 要 室 15. 装 飾 不 要	1 (4.5) 2 (9.1)						20 (90.9) 20 (90.9)	1 (4.5)	
個性的自律 型	16. 個性にあっ たもの 17. 多 様 性 18. 設 計 家 19. うわさ気に せず			1 (4.5) 10 (45.5)					21 (95.5) 21 (95.5) 3 (13.6) 11 (50.0)	
社会性重視 型	20. 環 境 問 題 21. 公 営 住 宅 ¹ 22. 公 営 住 宅 ²									22 (100.0) 17 (77.3) 11 (50.0)

1. 住宅は雨露をしのげさえすればよい。
2. 冠婚葬祭の行事に困らないように、続き部屋を持ちたい。
3. 家を建てる場合には、家相を気にする方である。
4. 人の目につく玄関や居間は豪華にしたい。
5. 資金に余裕があれば有名な建築家に依頼し、設計をすべて任せたい。
6. 住宅は近所とのつりあいのとれたものにするのがよい。
7. 住宅は近所とのつりあいのとれたものにしたい。
8. 住宅や家具は、人が見てもおかしくないものにしたい。
9. 家具や電気製品を買うときには、知人や友人の購入したものを重視したり、家族に選択をまかせたい。
10. 便利そうな道具（電気製品など）が新発売されると、使つてみたい。

- 11、お客は、居間を通して家族全員でもてなすのがよい。
- 12、家を建てる時は、建築家や大工まかせにしないで、家族皆で間取りをよく考え、みんなで楽しめる家になりたい。
- 13、マイカー利用者が多くて、電車やバスなどの公共輸送機関が廃止されることになろうとも、自分としてはいつでも利用できるマイカーを持ちたい。
- 14、住宅は、あまり広いものより、必要な部屋だけあればよい。
- 15、住宅は住むための道具であるから、できるだけむだな装飾やぜいたくな材料は使いたくない。
- 16、たとえ資金にあまり余裕がなくても、住宅や家具は自分の家の個性に合ったものを選びたい。
- 17、住宅は、標準化、規格化されたものより、値段は高くなっても個性のある多様なものであるべきだ。
- 18、資力さえあれば、有名な設計家に依頼して家を建てたい。
- 19、他人のうわさなど気にせず、住宅や住み方について改善すべきことがあったら何でも実行したい。
- 20、環境問題や公害問題・住宅問題に常に関心を持ち、改善のために働きかけたい。
- 21、持家を奨励するよりも、公営住宅などの公的住宅をもっと増やすべきである。
- 22、持家を奨励するよりも、公営住宅などの公的住宅をもっと増やしてほしい。

ものである。他領域における諸類型や解析軸もすべて含んだものとなっている。このように、個々の住居観型相互の関連を全体構図の中で位置付けることにより、個々の型の性格がより明確になると考えられる。また、ここで作成する諸類型には前もって優劣の評価は与えていない。

設定した住居観型仮説について、既研究における住居観型（住意識型）との対応関係の検討を含めて説明する。はじめに、住居観の解析軸を、価値意識の類型軸すなわち環境的更新性、機能的合理性、個性的主体性、社会的連帯性の4軸でとらえ、この各軸をプラス方向とマイナス方向（積極志向と消極志向）にわけて構成した。

まず、環境的更新性軸であるがこれは見田の〈時間的パースペクティブ〉の解析軸と対応するものであり、この軸に対するプラス方向を「斬新型」とした。これは新しい傾向を好む流行先取りの〈あたらしがり型〉といえるもので、西山・扇田の〈あたらしがり型〉に対応するものである。逆に、この軸のマイナス方向は「旧態維持型」で、いわゆる〈しきたり型〉といえるものであり、西山・扇田・上林の〈しきたり型〉に対応し見田等の〈伝統指向型〉に対応するものである。

次に、機能的合理性軸であるが、この軸に対するプラス方向を「合理型」とした。これは「住」に関して、その機能的合理性を第一とする〈合理主義型〉といえるもので、上林の〈むだなし型〉に対応するものであり、見田等の〈内部指向型〉に対応する型でもある。逆にこの軸に対するマイナス方向は、形式偏重の「非合理型」、すなわち〈みせびらかし型〉といえるものであり、西山・扇田・上林の〈みせびらかし型〉に対応するものである。またこれは、見田等の〈他人指向型〉に対応するものである。

さらに、個性的主体性軸であるが、この軸に対するプラス方向を「自律型」とする。これは、「住」に関して、他人のこと、世の中の流れをまったく気にせず、自分の個性や主体性を第一とする〈個性的自律型〉といえるものであろう。これは、上林の〈自律型〉に対応するものであり、見田等の〈内部指向型〉と対応するものでもある。この〈個性的自律型〉と、前の〈合理主義型〉は、ともに見田等の〈内部指向型〉に含まれるものであり、類似した側面をもつが、後者はむだをなくした機能性の価値に焦点を当てた〈内部指向型〉であるのに対し、前者は個人のもつ種々の価値内容を含んだ〈内部指向型〉という差異があると考えられる。この軸に対するマイナス方向は「他律型」で、「よそがやるから、うちでも」というように、自分の主体性、個性が弱くなり、囲りの動勢をみてそれに従う〈うちでも型〉といえるものである。これは、上林の〈雷同型〉に対応するものであり、見田等の〈他人指向型〉に対応するものでもある。この〈うちでも型〉と、前の〈みせびらかし型〉とは、ともに見田等の〈他人指向型〉に含まれ類似した側面をもつが、前者は他人に負けまいという消極的姿勢であるのに対し、後者は他人より前に立とうとする姿勢を持つものであり、より積極的な〈他人指向型〉といえよう。

なお、社会的連帯性軸であるが、この軸は見田の〈社会的パースペクティブ〉の解析軸に対応するものである。この軸に対するプラス方向を「社会型」とする。これは、「住」に関して自分の家庭生活を地域社会との関連の中でとらえ、社会的側面を重視する〈社会性重視型〉といえるものである。逆に、この軸の否定志向は「非社会型」で、家庭内の楽しみを重視し自分の家庭生活を優先し

た、社会的視点をもたない〈マイホーム主義型〉といえるものである。これは、上林の〈家庭天国型〉に対応し、見田等の〈快樂指向型〉に対応するものであると考えられる。なお、西山・扇田の〈たのしみ型〉の一部とも対応関係を持つが、前にも述べたように西山・扇田の〈たのしみ型〉が示す内容は幅広く、本仮説の〈合理主義型〉〈個性的自律型〉〈マイホーム主義型〉を包含した型と考えられ、逆にいえば本仮説では西山・扇田の〈たのしみ型〉をより細分した型として設定しているものといえる。

以上より住居観型として、8パターンが得られるが、なお各価値意識に対して明確な方向性をもたないものを「無志向型」とする。これは〈ねぐら型〉といえるもので、西山・扇田の〈ねぐら型〉、上林の〈無関心型〉と対応する型である。

ただし、これらの軸および住居観型は相互に重なりが認められることはありうる。例えば、〈うちでも型〉および〈みせびらかし型〉が、その向かう志向内容として都市部等では〈あたらしがり型〉として表現されたり、あるいは農村部においては〈しきたり型〉として表現されたりすることである。また、〈しきたり型〉〈あたらしがり型〉〈みせびらかし型〉等が、生活者本人にとっては〈たのしみ型〉と意識されていることもあろう。すなわち、これら9つの住居観型はそれぞれ完全に独立しているものではなく、生活者の中においては重複・複合しているものと考えられよう。

このように、建築関係および他領域における既研究からみられた諸類型と解析軸のすべてを包含して〈住居観型〉の仮説を設定した。

2) 住居観型調査項目の検討

a. 単一回答方式による調査

調査方法で述べた第一の調査の結果を、表5に示す。ほとんどの項目において、意図した住居観型に該当すると答えた割合がもっとも多くなっているが、〈しきたり型〉の「つづきま」項目では、〈合理主義型〉ととらえる者が多く、「つづきま」が合理的なものであると考えるものが多い。また、〈個性的自律型〉の「設計家」項目は、〈みせびらかし型〉ととらえる者が多く、これは、項目の中に「有名な設計家」という表現が含まれていることに問題があったと考えられる。また、〈ねぐら型〉と〈合理主義型〉、〈みせびらかし型〉と〈あたらしがり型〉、〈うちでも型〉と〈みせび

らかし型〉、〈マイホーム主義型〉と〈個性的自律型〉との間に混同がみられる傾向がある。

b. 複数回答方式による調査

この調査に用いた項目を表6に示す。この表において、1～20までは既研究において用いた項目であり、21～40は新しく作成した項目である。図1に、調査対象が、各項目について、それぞれの住居観型に対して該当すると答えた割合を示す。

ほとんどの項目は意図した住居観型に対する該当率がもっとも高いか、もしくはもっとも高い該当率のものに近い値をとっている。しかし、意図した住居観型に対する該当率が他の型に対するものより群を抜いて高い調査項目よりも、同程度の該当率をもつものが他にも存在する調査項目の方が多くなっている。この意図した住居観型に対する該当率の割合と、その全住居観型に対して示した該当数に占める、意図した住居観型に対する該当率の割合を図2に示す。意図した住居観型に対する該当率の値をみると、母親の場合の一つの項目を除いて全て50%以上の該当率となっている。学生と母親の両方共に意図した住居観型に対する該当率が70%を下回っているのは、項目の10、12、19、20、24、39、40の7個であり、このうち5個は、〈マイホーム主義型〉3個と〈社会性重視型〉2個で、「社会的連帯性軸」に関わる項目である。したがって、この軸に関わる住居観についての価値観の認識はやや困難であることを示しているといえよう。残りの24と40の項目は、価値観の特定のしにくい不適当な調査項目といえよう。

また、学生では該当率90%以上が20項目・80%以上が11項目・70%以上が2項目・60%以上が5項目・50%以上が2項目となっており、母親では90%以上が4項目・80%以上が12項目・70%以上が10項目・60%以上が9項目・50%以上が4項目・50%未満が1項目である。このように、意図した住居観型以外の型に対する該当率は母親の方が高い傾向がみられるが、意図した住居観型に対する該当率については学生の該当率の方が高くなっている。

各調査項目において、複数の高い該当率をもつ項目を検討すると、〈ねぐら型〉を意図した項目では〈合理主義型〉の該当率も高く、逆に〈合理主義型〉を意図した調査項目では〈ねぐら型〉に対する該当率も高い傾向が見られ、両住居観型の関連性が認められる。また、接客や社会的規範・

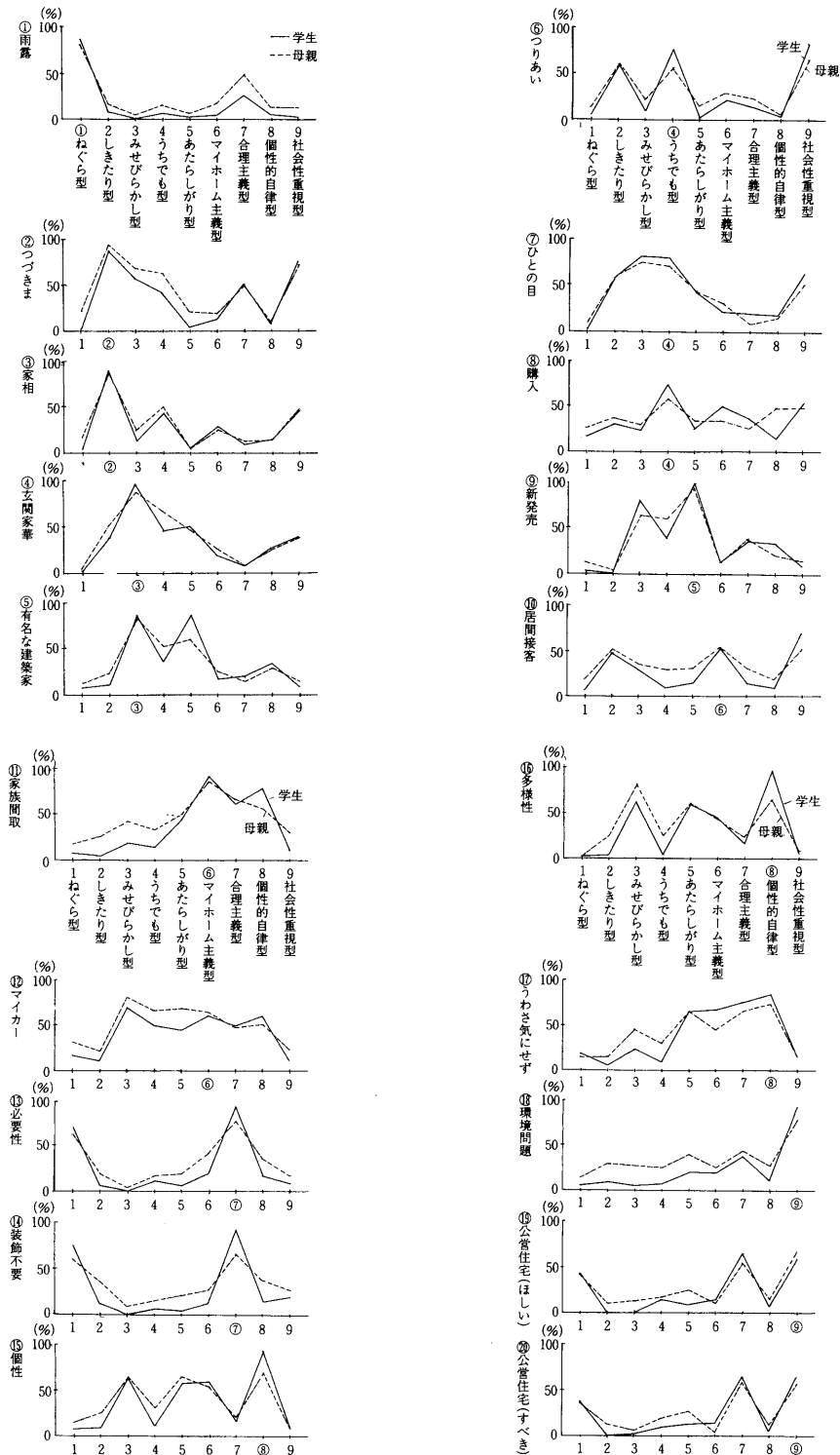
表6 調 査 項 目

項目 番号	調 査 項 目
1、	住宅は雨露をしのげさえすればよい。
2、	冠婚葬祭の行事に困らないように続き部屋を持ちたい。
3、	家を建てる場合には、家相を重視したい。
4、	人の目につく玄関や居間は、豪華にしたい。
5、	資金に余裕があれば、有名な建築家に依頼し、設計をすべて任せたい。
6、	住宅は、近所とのつりあいがおかしくないものにしたい。
7、	住宅や家具は、人が見ておかしくないものにしたい。
8、	家具や電気製品を買うときには、知人や友人の購入したものを重視したり、家族に選択をまかせたい。
9、	便利そうな道具（電気製品など）が新発売されると使ってみたい。
10、	客は居間に通じて家族全員でもてなしたい。
11、	家を建てる時は、建築家や大工まかせにしないで、家族皆で間取りをよく考え、みんなで楽しめる家 にしたい。
12、	マイカー利用者が多くて、電車やバスなどの公共交通機関が廃止されようとも、自分としてはいつで も利用できるマイカーを持ちたい。
13、	住宅はあまり広いものより、必要な部屋だけにしたい。
14、	住宅は住むための道具であるから、できるだけむだな装飾やぜいたくな材料は使いたくない。
15、	たとえ資金にあまり余裕がなくても、住宅や家具は自分の個性にあったものを選びたい。
16、	住宅は、標準化、企画化されたものより、値段は高くなっても個性のある多様なものであるべきだ。
17、	他人のうわさなど気にせず、住宅や住み方について改善すべきことがあったら何でも実行したい。
18、	環境問題や公害問題に常に関心をもち、改善のために働きかけたい。
19、	持家を奨励するよりも、公営住宅などの公的住宅をもっと増やしてほしい。
20、	持家を奨励するよりも、公営住宅などの公的住宅をもっと増やすべきだ。
21、	先祖代々の土地や住宅は、子供に受け継がしたい。
22、	個室や居間よりも客間の方を優先し、お金をかけたい。
23、	冠婚葬祭は、できるだけ盛大に行ないたい。
24、	客間や応接間は、子供には勝手に使わせたくない。
25、	男の人には、台所に入ってもらいたくない。
26、	入浴・盛り付けの順番や、座席の位置ははっきり決めたい。
27、	住宅は、寝られさえすればいい。
28、	住宅にはあまり関心が無く住みたい家のイメージなどはもっていない。
29、	住宅の外観や体裁には充分気を使って、恥ずかしくないようにしたい。
30、	外観や恰好より住宅の住み心地や利便性の方を重視したい。
31、	電気製品などの生活用品は、流行を先取りして生活の中に採り入れたい。
32、	電気製品などの生活用品は、多くの家庭で使われているようなものを、生活の中に採り入れたい。
33、	電気製品などの生活用品は、自分のライフスタイルに合ったものを選択して採り入れたい。
34、	電気製品などの生活用品は、生活スペースを狭くしたりするだけで無駄なことが多いので、必要最低 限のもの以外は生活に採り入れたくない。
35、	電気製品などの生活用品は、人に見られても恥ずかしくないように、できるだけ質の良い高価なもの を生活の中に採り入れたい。
36、	安全を確保するため、地域自治会や婦人会等に参加して、共同購入や不買運動を行ないたい。
37、	衣食住等の生活用品は、品質が保証されていれば、一流メーカーのものよりもノーブランド商品等の 安いものを選びたい。
38、	和室には、必ず床の間を付けたい。
39、	公害等の環境問題にはあまり関心はないが、自宅には水や空気の浄化装置を取付けたい。
40、	自分で設計をしたり、建てる際のわずらわしさを考えると、住宅は注文住宅よりも建売住宅の方がよ い。

習慣あるいは他者との関係を示す項目（2、3、6、7、10、21、22、23）では意図した住居観型に関わらず＜社会性重視型＞に対する該当率が高くなっている。また、＜あたりしがり型＞を意図した項目（9、31）は、＜あたりしがり型＞と＜みせびらかし型＞の両方の該当率が高い双頭型となっており、＜みせびらかし型＞を意図した項目である5、35の場合も同様の双頭型である。すなわち、＜みせびらかし型＞と＜あたりしがり

型＞に対する認識には、関連性が認められる。

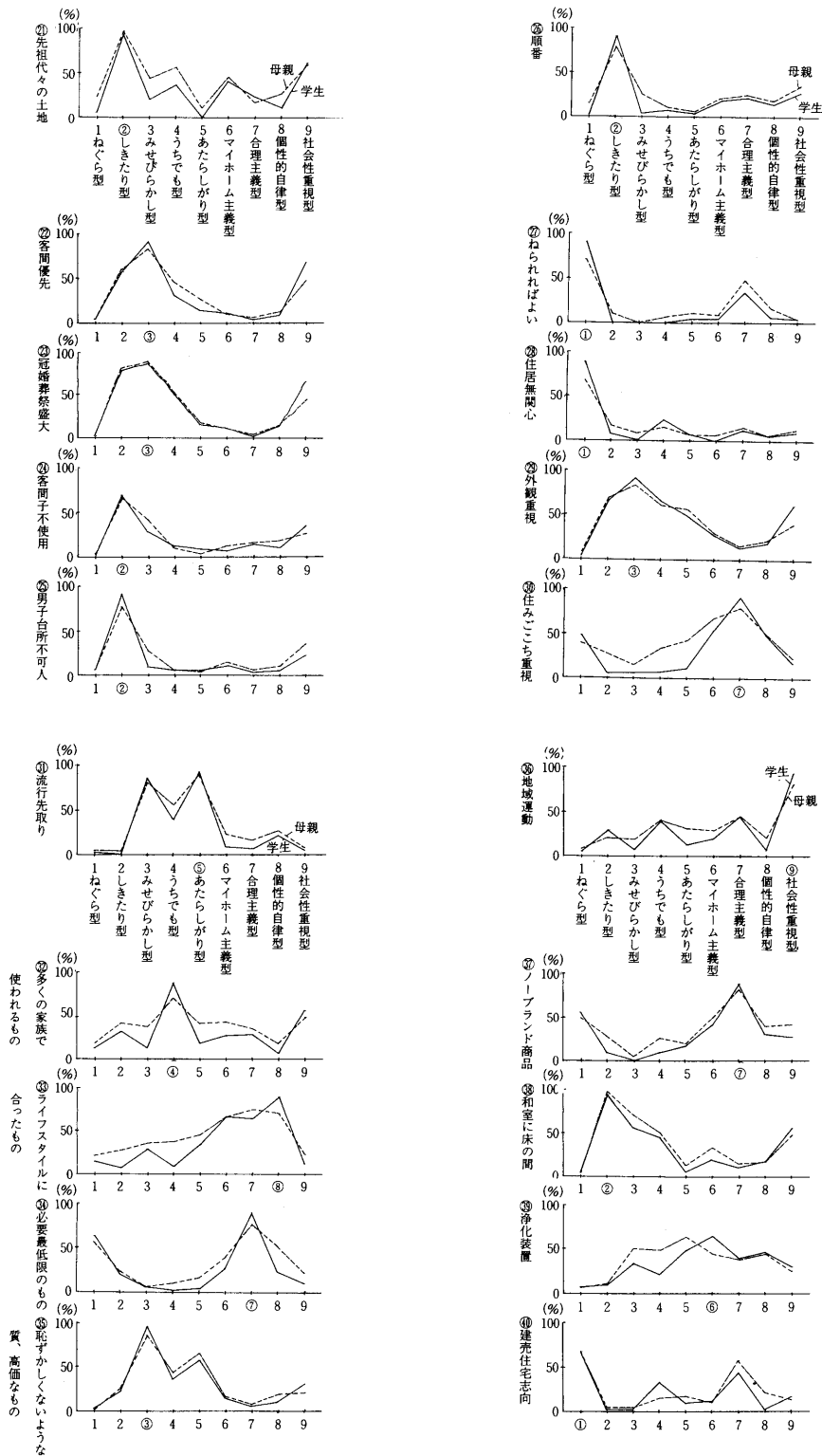
図3に、各調査項目別に該当すると答えた平均住居観型個数を示す。平均値は、学生の「1、雨露」項目の1.38から、母親の「12、マイカー」項目の4.56の範囲にある。全体的に、学生よりも母親の方が平均点の高い項目が多く、平均点が1点台の項目数は学生7個・母親3個、同様に2点台の項目数は学生18個・母親13個、3点台の項目数は学生15個・母親20個、4点台の項目数は学生0



○印で囲ったものは、こちらが意図した住居観型を示す

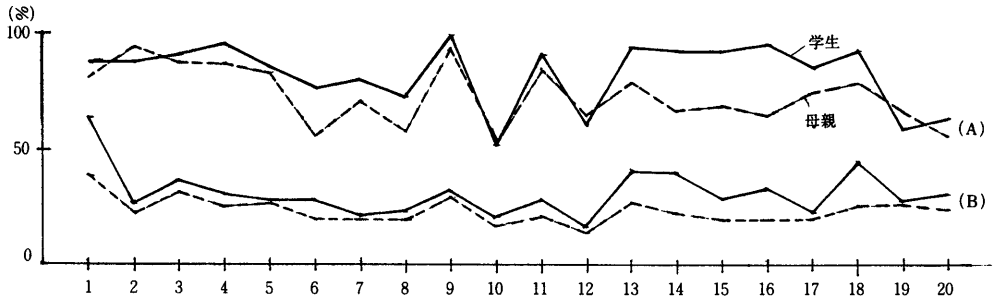
図 1-1. 調査対象が各項目に対して該当すると答えた住居観型の割合

住居観に関する研究 その6、住居観型と調査項目の検討



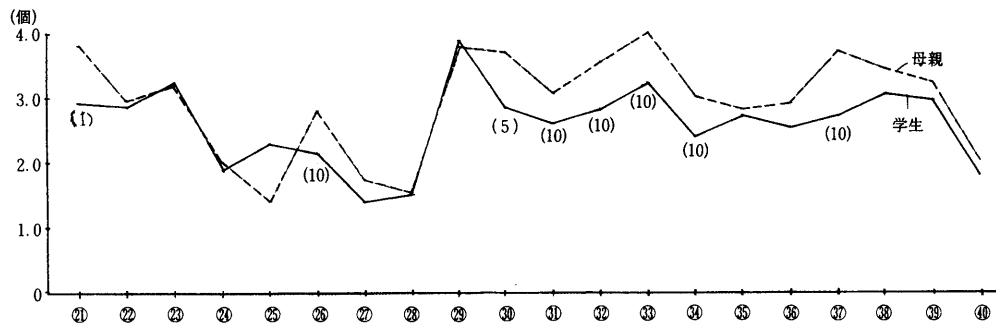
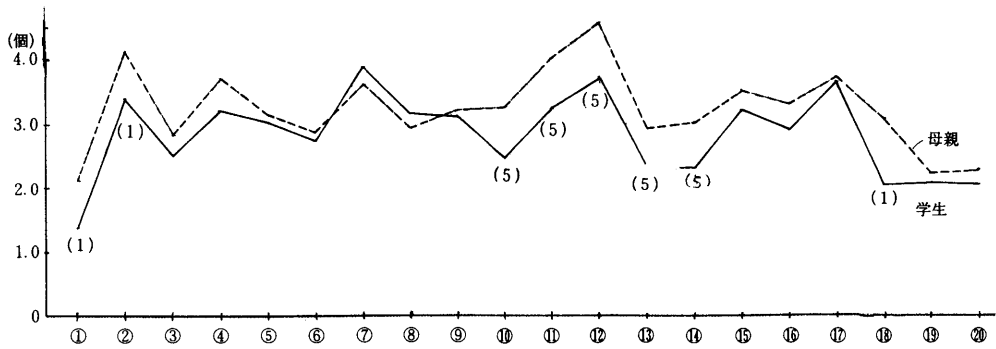
○印で囲ったものは、こちらが意図した住居観型を示す

図 1-2. 調査対象が各項目に対して該当すると答えた住居観型の割合



数字は項目番号

図2 意図した住居観型に対する該当率 (A) とその全該当回答数中に占める該当率 (B)



数字は項目番号 () 内の数字は平均値の差の検定による有意差水準を示す。

図3 各項目に対して、該当すると答えた住居観型の平均個数

住居観に関する研究 その6、住居観型と調査項目の検討

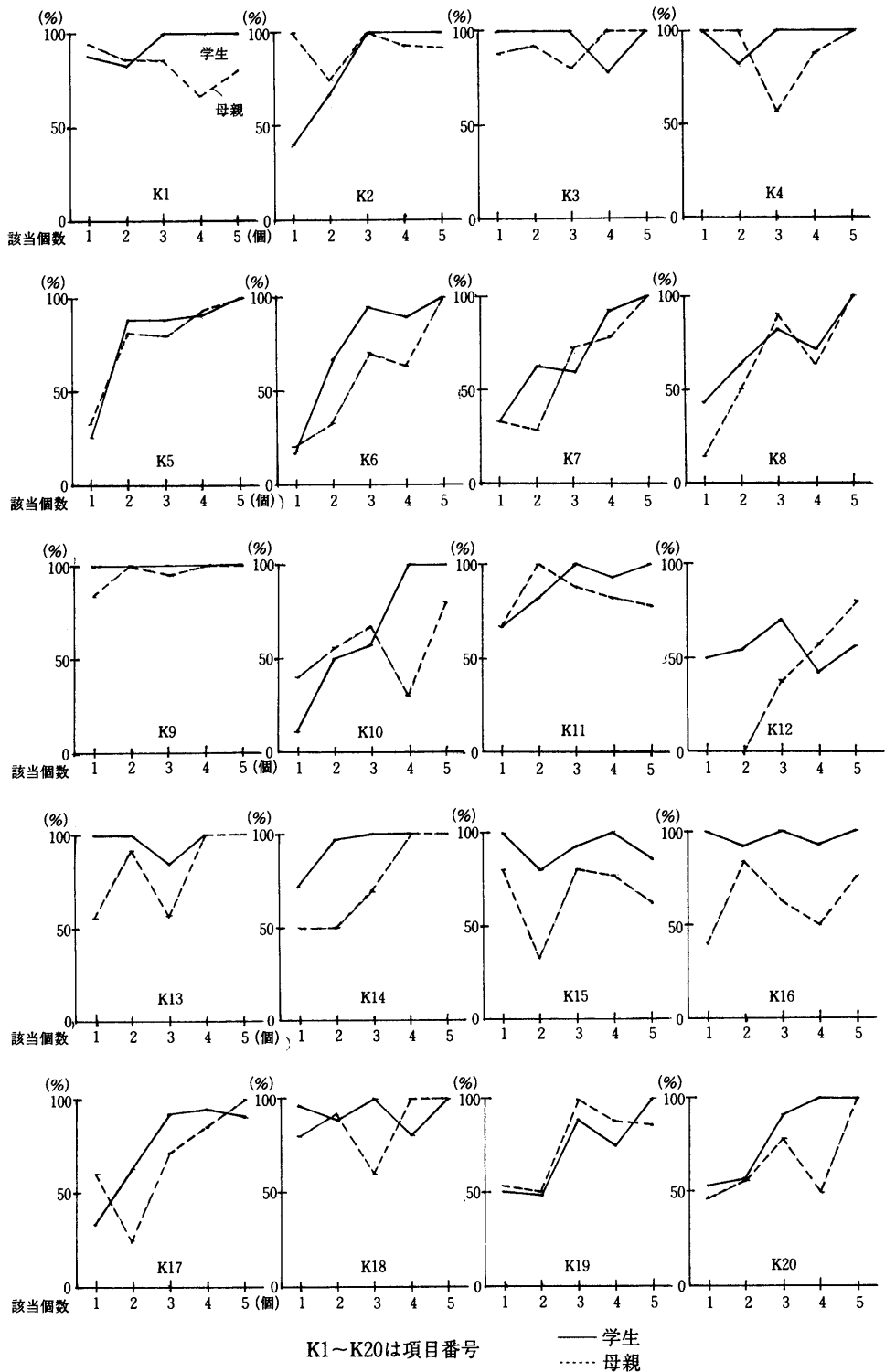


図 4-1 該当個数別にみた意図した住居観型に対する該当率

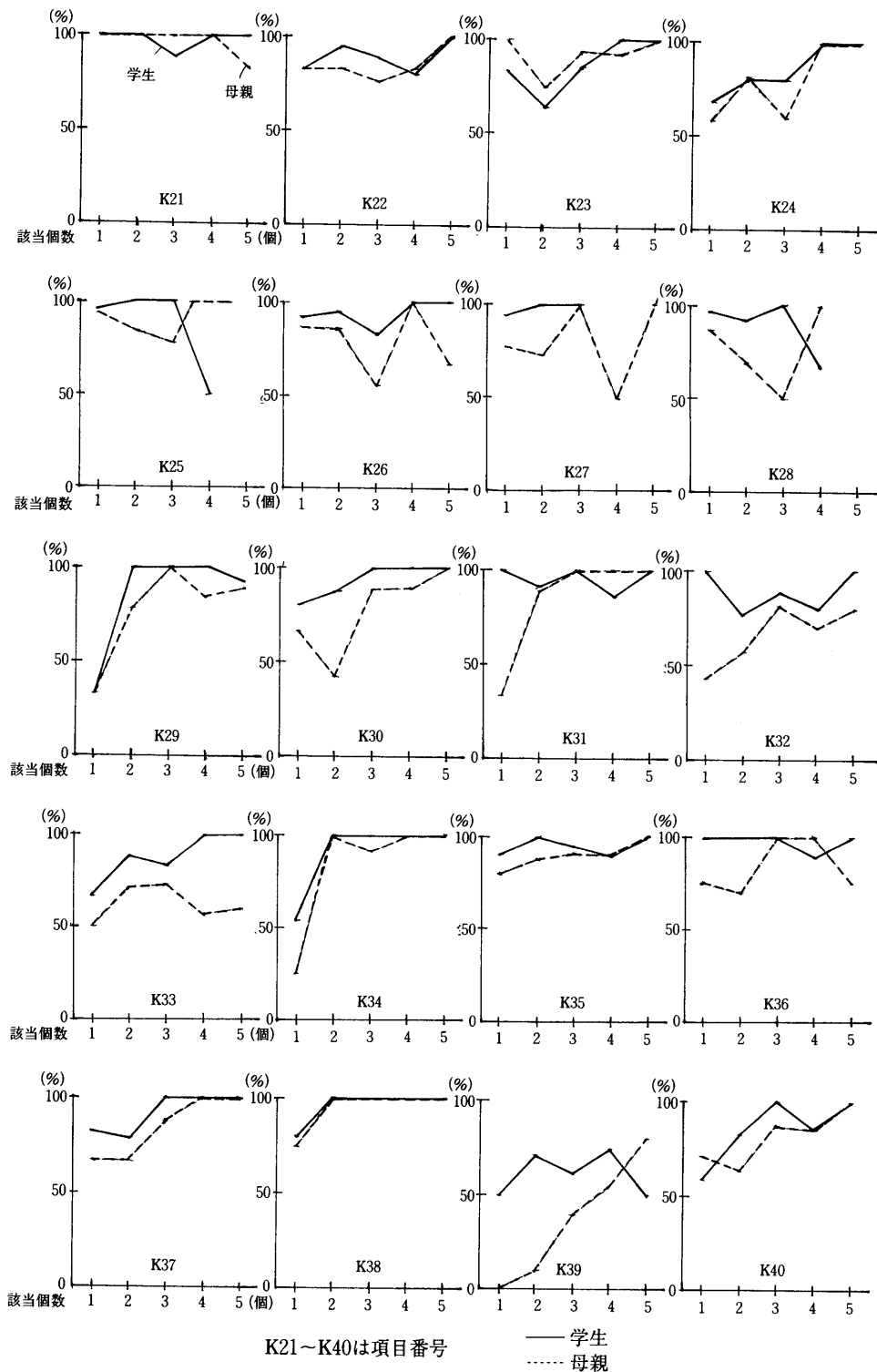


図 4-2 該当個数別にみた意図した住居観型に対する該当率

個・母親4個となっている。すなわち、一つの現象に対して、母親の方が多くの価値観の側面をとらえているといえる。また、住まいに対して明確な志向をもたない〈ねぐら型〉を意図した項目である1、27、28、40の各項目の平均点は共通して低く、この住居観型においては、多様な価値観の側面はとらえにくいものであることを示している。

次に、各住居観項目別に、該当すると答えた住居観型個数によって、各調査項目について、こちらが意図した住居観型に対して該当すると答えた割合がどのように変化するかを図4に示す。全体的に、該当住居観型個数が多くなるほど該当率が上昇する項目が多く、全体の該当率が低い項目ほど顕著に現われているといえる。

次に、採用した調査項目の妥当性を比較検討する。〈ねぐら型〉の調査項目を意図した1、27、28、40の項目のうち、〈ねぐら型〉に該当すると答えた割合（以下、「該当率」と記す）が、学生・母親ともに80%を超えるのは項目1のみであり、他の型に対する割合も低く、この項目が適切であると考えられる。同様に、〈しきたり型〉の項目を意図した2、3、21、24、25、26、38の項目のうち、学生・母親ともに〈しきたり型〉に対する該当率が80%を超えるのは、2、3、38の項目であるが、この中で一般の居住者がこれらの項目について「そう思う」と賛同する割合の側面を加味すると、2と3が調査項目としては適切であると考えられる。次に、〈みせびらかし型〉の項目については、この型を意図した4、5、22、23、29、35の全てにおいて学生と母親の該当率が80%を超えている。しかし、このうち22と23、29の項目については、〈しきたり型〉が該当すると回答する割合も高く、35では〈あたらしがり型〉に対する該当率が高くいずれも不適当と考えられ、採用した4の項目が適切といえるが、5については〈あたらしがり型〉の割合も高いことから、若干考慮する必要があるといえる。〈うちでも型〉については、この型を意図した6、7、8、32の項目の全てにおいて、学生・母親ともに〈うちでも型〉該当率が80%を超える項目はなく、〈社会性重視型〉あるいは〈しきたり型〉〈みせびらかし型〉の該当率が高くなっている。これは、〈うちでも型〉として他の人に雷同するというこの型のこの特徴の側面よりも各調査項目に具体的に表現された現象の方に注目が集まった結果であると考えられる。つぎに、〈あたらしがり型〉を意図し

た9と31の項目については、どちらも学生と母親のこの型に対する該当率が80%を超えており、また該当率の傾向も近似しているため、どちらの項目を採用しても大差はないといえる。次に、〈マイホーム主義型〉を意図した10、11、12、39の項目のうち、学生と母親ともに80%を超えるのは、11項目のみである。この型の特徴と考えた社会的な面よりも個別家庭の方を重視する側面をとらえた12と39の両項目を比較すると学生と母親の両方が60%を超えるのは12項目の方であり、この項目を採用するのは妥当であると考えられる。次に、〈合理主義型〉を意図した13、14、30、34、37の項目について、この型に対する該当率は、いずれもよく似た傾向を示しており、どの項目を採用しても大差はないと考えられる。〈個性的自律型〉を意図した15、16、17、33の項目は、この型に対する該当率は、学生の場合すべての項目について80%を超えており、母親についてはこれを下回るもののすべて60%を超えている。このため、いずれの項目を採用しても大差はないと考えられる。次に、〈社会性重視型〉を意図した18、19、20、36の項目についてみると、地域環境や地域の問題を重視する側面を示す18、と36の項目のこの型に対する該当率はほぼ同様の傾向を示すが、18の項目の方が、他の型に対する該当率が少なく妥当な項目と考えられる。19と20の項目は、この型と〈合理主義型〉に対する該当率は、すべて50%を超えているが、ほぼ同程度の値となっており、公営住宅に対しては社会的な面と合理的な面の両面が評価されており、〈マイホーム主義型〉と同様に、〈社会性重視型〉に対する価値観の認識が困難であることを示している。

4. ま と め

本研究では、住居観型仮説について、再度検討を加えた上で、これまで行ってきた住居観に関する研究で住居観型抽出のために用いた調査項目の妥当性を検討し、また新たな調査項目を加えて既研究で用いた調査項目の優位性を検討することを目的とした。そのために、三重大の学生とその母親を対象として、調査項目がこちらで意図した住居観型に該当するととらえられているかどうかを調べるための二つの調査を行った。その結果、次のことが明らかになった。

1) 行った2調査ともに、ほとんどの項目において、こちらが意図した住居観型に該当すると答え

た割合が、もっとも高くなっている。

- 2) こちらが意図した住居観型に対する該当率が低い項目は、＜マイホーム主義型＞と＜社会性重視型＞に多くみられ、「社会的連帯性軸」に関わる価値観の認識が困難であることがとらえられた。
- 3) 2調査ともに、こちらが意図した住居観型以外に該当すると答えた割合が高い住居観型が存在する項目も多く、これらは＜合理主義型＞と＜ぬぐら型＞、＜みせびらかし型＞と＜うちでも型＞、＜みせびらかし型＞と＜あたらしがり型＞に対する認識が、関連性を強くもっているためと考えられる。
- 4) 第2の調査では、各調査項目に対して、該当すると答えた住居観型の個数は母親の方が多く、一つの現象に対して多くの価値観の側面をとらえているが、一方こちらが意図した住居観型に対する該当率は、学生の方が高い。すなわち、母親は、住経験の豊富さから一つの現象に対して多様な価値観の側面をとらえるのに対して、学生の方は、生活経験からとらえるよりも、より純粋に理論的・観念的なとらえ方をしているといえよう。
- 5) 既研究で用いた項目を、新たに作成した項目と比較した結果、ほぼ、既研究で用いた調査項目

が、新たに作成した項目と同条件もしくはより望ましいものであることが認められた。

注

- 1) 中島喜代子他：「住居観に関する実証的研究（その1）（その2）」、日本建築学会近畿支部研究報告集、1982
中島喜代子：「住居観に関する研究（その1）～（その5）」、三重大学教育学部研究紀要第34巻～第36巻、1983～1985
中島喜代子：「住居観に関する実証的研究（第1報）住居観研究の枠組みと住居観型の仮説検証の試み」、日本建築学会論文報告集、第360号
- 2) 西山卯三、扇田信：「住意識と住要求」、日本建築学会研究報告46号、1959
- 3) 扇田信：「住居観の研究－住意識について－」、日本建築学会論文報告集第68号
上林博雄、北浦かほる：「住生活・住宅の型展開に関する研究」、大阪市立大学家政学部紀要No. 16
服部岑生他：「住要求からみた独立住宅の類型化に関する研究」、住宅建築研究所報 No. 4
見田宗介：「価値意識の理論」、弘文堂、1966、における価値の性格類型や門脇厚司：「ニューライフ点描」、リサーチ出版、1977、における生き方の型などがある。